sample

92-05-25078

慶應義塾大学ビジネス・スクール

# 非指示的に教えるということ

## － 学習者が自己と向き合い、新たな自己を獲得することを支援する教え方 －

ハーバード大学名誉教授 C.R.クリステンセンの著書「ケースメソッド実践原理」には、その第５章に「指示的か非指示的かを選択する」という章がある。この章の前書きには「教育上、重要な選択に関する問題である」「教師の選択いかんによって、知識の獲得と創造に関する学生のレベルが決まるといっても過言ではない」とあることからも、私たちがケースメソッド教育への理解のレベルを一段階高めようとしたときに、避けては通れない重要なポイントなのだと思われる。

あるとき私は、わが師である高木晴夫教授に、「指示的・非指示的ということについての先生の考えをお聞かせいただきたい」とお願いして、時間を取ってもらったことがあった。そのときの会話はまるで「仙人との会話」のようだったと今でも思い出される。それは確か、次のようなやり取りだった。

### 仙人との会話

これから話すことは「あくまでも私の理解」なのだけれどね。

指示的に教えるにしても、非指示的に教えるにしても、「教える側」の立場から考えるより

---

このノートは慶應義塾大学ビジネス・スクール博士・修士課程併設科目「ケースメソッド教授法特論」の教材とするために、竹内伸一（ケースメソッド教育研究所）が作成した。（2004.11）

本ノートは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、ノートの複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒223-8523 神奈川県横浜市港北区日吉本町２丁目１番１号、電話 045-564-2444、e-mail case@kbs.keio.ac.jp）。また、ノートの注文は http://www.kbs.keio.ac.jp/case/index.html。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、本ノートのいかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またはいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送は、これを禁ずる。

Copyright©2004 は慶應義塾大学ビジネス・スクールが保有する。

も、「学ぶ側」の立場で考えていった方がいいね。「学ぶ」ということを理解するには、いつくかの道具立てが必要になるな。それじゃあ、そんな道具を見つくろいながら、話を進めていこうか。

*話の始まりがこのような滑り出しのとき、先生はしばしば途中で仙人になる。仙人の話だから下界にいる私には、途中でわけがわからなくなって、話に付いていけなくなることが多い。今日は典型的な仙人パターンの切り出しだった。*

**ー 学んでいるのは「自己」である ー**

学んでいる主体になっているものは何なんだろう。まず、ここから入ろう。

学びの主体になっているのは「自己」だね。「自我」という言葉で言い換えてもいい。ここから先の説明には、「自己」という概念を駆使する必要があるから、まずはその正体を探ることをしてみようか。

「自己」っていうのは何か得体の知れないもののようにも思えるけれど、結論から言えば、神経細胞の連結体であって、まっ、平たく言えば、その正体は臓器だと言っていいね。人間の身体で心が宿っているところは大脳だから、自己とは大脳の活動であって、「自己は大脳にある」という言い方もできる。ここまではいいですか。

よし、じゃあ、次。今度は、自己と外界との関わりを考えていこう。

*脳とか臓器が出てくると、かなり「まずい」というのがこれまでの経験から言えること。今日は確実に仙人話になるんだな。*

**ー「自己」が認識しているものとは「モデル」である ー**

さてそれで、その「自己」というものが、自分の外側にあるものを認識しています。ここで押さえておきたいことは、ブレーンシステムの活動としての「自己」は、外界を認識する場面では、外界にあるあまねくすべてを、ありのままに認識するわけではないということで

す。そこでは大幅な捨象[1]が行われていて、外界にあるものが都合よく単純化されて人間の認識に至っているということだね。こう考えると、認識っていうのはある種の「モデル化」なんだということが分かるよね。ある人にとっての外界認識とは、その人の「自己」が、その人に見えている外界を、その人なりにモデル化したものだということです。

ここまではいいでしょう。次は少しややこしくなるかもしれないかな。

*えっ、もうそんなにややこしい話に入ってしまうのか。もう少し付いていきたいと思った私は、「集中して聞こう。それから分かったふりをするのは絶対に止めよう。」と自分に言い聞かせた。*

自己が外界を認識するというのは、いま話したその通りなのだけれど、それと同時に自己は、自己をも認識するんだ。自己が外界を認識したときにモデル化して認識したのと同じように、自己が自己を認識するときにも、自己を捨象・単純化してモデル化しています。

これは具体的に言わないと、少し分かりにくいかな。例えば、穏やかに過ごしているときに、人間は自分の心臓が動く様子を意識していないね。肝臓の動きも認識していない。つまり、このときの自己は、心臓や肝臓の動きをモデル化の対象に入れていないということになります。

しかし、心臓も胃も、大腸も肝臓も、絶えず大脳と双方向の情報のやり取りを行っているわけで、脳にある自己は、心臓、胃、大腸、肝臓をいつも捉えているんです。にもかかわらず、多くの場合、自己は自分の心の動きだけを「自己」だと捉えてモデル化する。その情報の抜け落ち方たるや、かなりのものです。

*よかった。今日はまだ付いていけている。顔を上げると、「まだ付いてきているな」と判断したのであろう先生が、こう続けた。*

モデル化して得た認識を通して、人間はいくつかの気づきに至ります。それは「自分の作ったモデルは不完全なんだな」と気づくことでもあるし、「所詮、すべてのものに対して認識が及ぶことなどないんだ」という気づきでもあるだろうし、「そもそも人間とはそういう生き物なのだ」という気づきにもつながっていくのだろうね。

[1] 捨象：事物または表象のある側面・性質を抽(ぬ)き離して把握する心的操作を「抽象」と呼ぶが、その際おのずから他の側面・性質を排除する作用が伴われる。このような作用を「捨象」という。

**ー「学ぶ」ということは、「モデル」を更新すること ー**

この辺まででだいたい道具は揃ったはずなので、「自己」と「学習」ということを接続させてみよう。結論を先に言ってしまうと、「学ぶということはモデルを更新すること」なんだね。すでにあるモデルを修正したり、新しいモデルを得て、古いモデルを捨てたりすることが学習なんだ。学習に完全なゴールがないのは、その行為はどこまで行っても捨象と単純化と更新によるモデリングだからです。

このように考えると、「学び」とか「気づき」という言葉の意味上の目的語を理解することができますね。それはもう言うまでもなく「モデル」です。人間はモデルを学び、モデルに気づいていく生き物だというわけです。

*モデルが更新されると、それによって自分から見たときの「ものの見え方」が変わるということのようだ。そして、それは外界についてばかりではなく、自分が自分を見るときのその見方も変わり得るというメッセージを、私はここまでの説明から受け取った。よし、まだ付いていけている。次、来い！*

**ー「自己」のあり方次第で、学びが変わる ー**

さあ、ここが最初の山場です。がんばって付いてきて。

自己が外界と自己の両方をモデル化するっていうことは、さっき話した通りなんだけれど、外界をモデル化するときにも、実は自己に関するモデルが活躍しているんだ。なぜなら、私たちが外界をモデル化するときには、「外界をモデル化しようとしている自己を、自分自身がモデル化する」というプロセスを必ず通過しているからです。

ここで、先ほど接続させて考えた「自己認識と学習の関係」をもう一歩深めて理解してみると、こう言える。 ―「学ぶということは、自己に関するモデルを自分が操作しながら、操作後に得られた自己モデルを通して、外界をモデル化し直すこと、あるいは新たにモデル化すること。」― それをさらに進めて言えば、こういう言い方もできるな。―「学びとは外界をモデル化して自分の中に取り入れることであるが、取り入れる自分のモデル次第で、外界認識の成果物としてのモデルが変わる」―

まっ、ここが今日の山場かな。このことが理解できたら、「指示的な教え方」「非指示的な教え方」の違いは何かという話に進めるよ。

*先生がそういい終わった直後に、「ちょっとキツくなってきた」という信号が脳から届いた。私の場合、いつもだと、頭がこういうサインを送ってくる 10 分後くらいに思考が止まるのだけれど、今日はどうなるのだろうか。*

*そんなことを考えているうちに、ひとつの疑問が湧いてきた。これを質問することで、自分の理解度が確認できるかもしれない。それは、こんな問いだった。 ―「そもそも、なぜ人によって自己が違うのですか。」*

「人によって自己が違う理由」は、いろいろな角度から説明できるけれど、ここまでの文脈を生かして説明するならば、「自己が認識するときの立ち位置としての原点がひとりひとり違うから」というのが、いちばん分かりやすい説明になるんじゃないかな。

最初に言った通り、自己というのはそもそも臓器だから、自己の原点とは臓器の作動状態としての原点です。健康な人と末期ガンの宣告を受けた人は、暖かな小春日和を同じように認識しません。健康な人の自己と、常に余命を意識している人の自己は、それぞれ臓器の作動状態に起因する原点が異なっているからです。このように考えると、自分の自己を他の人の自己と比べるということがそもそも困難だし、自己の原点は人ごとに相違する相対的なものであることがわかるね。

**― 指示的に教える／非指示的に教える ―**

それじゃあ、まず、「指示的」の方から考えてみよう。本人によるモデル認識に頼らず、外部から情報を与えて学習させてしまおうという教え方を、「指示的な教え方」と呼びましょう。このような教え方を、ここまでの説明のフレームの中で説明すると、次のように表現できますね。

指示的な教え方では、本人によるモデル認識とは関係なく、第３者が既製のモデルを作ってしまい、それを学習者に与えてしまいます。学習者はあつらえられたモデルをそのまま取り入れることもあるだろうし、そこに自分なりの解釈を加えて取り入れることもあるでしょう。ただ、いずれにせよ、この教え方には不十分さが残ると言わざるを得ないね。なぜなら、学習者本人にとっては、自分が自己をどのように見ているかが視野に入らないからです。

指示的な教え方とは、本人が自己を視野に入れないままに学ばせてしまうこと、すなわち、自己モデルの操作を行わせないで新たなモデルを認識させることを指します。指示的な教え方にはある種の効率のよさがあるので、一概に否定されるべきものではないのだけれど、これから話す「非指示的な教え方」とはいくつかの点で異なります。

はい、お待たせしました。これでやっと「非指示的な教え方」の説明ができますね。じゃ、行きますよ。

学習者が新しいモデルを得ようとする都度、いまある自己を視野に入れた上で、外界に関する新たなモデルを作るために、自己モデルも操作せずにはいられなくなるように仕向ける教え方があったとします。この教え方のもとでは、学習者は自己モデルと外界モデルの両方を、交互に、あるいは同時に更新させていく必要があります。このような学びが進行するように意図して教える教え方が「非指示的な教え方」です。

*そういうことだったのか。自己モデルと外界モデルの両方を更新させるということは、自分のものの見方が変わるから、その分だけ、自分の外にある新しいものに気づくということなんだな。ここまでけっこう難しかったけれど、理解できた！*

**ー 実務家教育の場には非指示的な教え方がふさわしい ー**

ここまでの説明では、ずっと主語を「人間」とか「私たち」としてきたので、この先は主語を「大人」、あるいは「実務家」「経営のプロ」と置き直してもう少し議論してみようか。

初等教育や中等教育と比べれば、大人に向けた教育というのは、間違いなくモデル教育の色合いが濃いです。例えば、経営幹部に欠かせないと言われるコンセプチュアルスキルの正体は、高度な概念操作を伴うモデリングスキルであるといっても過言ではないしね。

それから、またちょっと脳みその話になるけれど、前頭連合野が担当している脳の高次機能は、他ならぬ「モデル」を扱っています。人間がモデルを操作していることは脳科学の研究によって既に解明されているし、そのような脳の営みが「経営のプロフェッショナル」と呼ばれる実務家に求められていることも、もはや疑いはないです。

だから、ビジネススクールを始めとする実務家教育の場では、なるべく高度なモデル操作を、なるべく数多く行う機会を設けた方がよいということになりますね。自己モデルと外界モデルの同時更新を絶えず迫る教育方法が、実務家教育には適しているということです。

*ここまでを聞いていて、「今お話いただいたこととディスカッションとの関係は、どのように理解することができますか？」ー この質問がパッと口から出た。*

よし、分かった。今からそれに答えよう。最近になって、「大人の学習」ということについて、学習理論の研究成果からいくつかのことが分かってきているので、そんな話を交えて説明してみようか。

ビジネススクールなどの授業で見られるケースメソッド教育では、ケース教材をもとにして行うディスカッションが学びの媒体になっていますね。ここでふたつのことに注目してみます。

まずひとつは、ケースという教材は、実際に起こっていることをベースに書かれていることです。大人の学習というのは、現実物や事実を扱うことで進行していくという特徴があります。子どもだったら単にイメージやモデルの操作だけで学習が進行するのだけれど、大人の場合は現実世界での生活年数が長くなっているために、事実そのものや事実をベースにしたモデルを扱うことで学習が進行するんです。

つぎ。ディスカッション授業では、「発言」を介して学習が行われていますね。これはとても重要なことで、私たちが何かについて話そうとするときは、必ず「自己モデルを前提にして話す」ということを行っています。なぜなら、人間は自己モデルを前提にしてしか、話すことができないからです。これは他の人の話を聞くときでも同じで、人は自己モデルを通して、他の人の話を聞いて、それを理解しています。だから、同じ話を聞いても、人によって理解が異なるわけ。ということは、新しいことを話そうとしたら、自己モデルを変えていかないといけないですね。つまり、ディスカッション授業には、発言の都度、モデルの更新を進行させるチャンスがあるのです。

このようなことからも、事実をベースにした教材をもとに、相互の発言を介して学ぶという学習スタイルを取ること自体が、非指示的教育に向かうための第一歩になっているし、大人の学習方法としてもとてもよくマッチしているということが、確かに言えますね。

もうだいたい説明できたよ。終わろうか。

*先生のこのひと言で、私の緊張の糸がふっとゆるんだ。「今日は何とか最後まで頭がもちこたえた･･･らしい。」自分を少しだけ褒めてあげたかった。*

## 教育方法だけでなく、学び手の意識も重要である

表面的な理解だと、ディスカッションを通した学びが「非指示的な教え方による学び」で、レクチャーによる学びが「指示的な教え方による学び」 ― 大筋ではそういうことになるのだが、先生の話をよく聞けば、そんなに単純な二元論ではないことが分かる。つまり、レクチャーでも非指示的に教えることはできるのだ。現に私はいま、仙人によって、自分が持っている自己モデルと外界モデルを更新するように促され、おそらく両方のモデルを更新した。それによって私の中に新たな教育観が広がった。ものの見方がいくらか変わったから、これまでにも見てきた同じものが、今度は違って見えた。これは大きな気づきであった。

私にとっての今日の学びはもうひとつある。それは、学ぶ側が「自己モデル」を、もっと平たく言えば「自分のものの見方」を、変えることに積極的であるかどうかという、学習姿勢のあり方が大きく問われるということだ。私はこれまでに幾多のディスカッション授業に参加し、「自分のものの見方」を頑なに守ろうとする人たちをたくさん見てきた。

ディスカッション授業さえ受ければ、必ず自分のものの見方が変わるのではない。このことを逆手にとって考えれば、レクチャー授業を受けながら「自分なりのものの見方」を上手に新しくしてきた人も数多くいるのだろう。

教育方法の問題もさることながら、学ぶ側の意識の問題も負けずに大きそうだと、私は痛感したのだった。

不許複製 慶應義塾大学ビジネス・スクール 2005 Jul.
コンテンツワークス株式会社 BookPark サービス